命の贈り物

「私から切符を受け取らずにこの旅を始めようというのですか？　下りてきてあなたに託された仕事を行いなさい。今日の正午に礼拝ホールに来て、いつも通りアーラティを行うようあなたに命じます」

それはご命令、その心も体も最期の旅立ちへの「しっかりした覚悟」が出来ているシュリ・シェーシャギリ・ラーオに対する主の神聖なご命令でした。

ババの声は無情に響きました。確かに、ババはとても不親切に見えました。周りにいる人たちに対してだけでなく、この話の中心人物であるシュリ・シェーシャギリ・ラーオに対しても。ラーオは倒れた後、病に臥せってしまい、やがては死ぬ運命にある人間の肉体を脱ぎ捨てるのを厭(いと)わず、永遠の真理を声高に宣言していました。

「五大元素〔地・水・火・風・空〕からなるこの肉体は崩壊し、その構成要素に還ろうとしている。私は解脱し、自由になるのだ！」と。

しかしスワミには、この賢者のような召使いのために別の計画がおありでした。ラーオは14 年もの長い間、旧マンディールとその後はプラシャーンティ・ニラヤムのサンクタム・サンクトラム〔至聖所〕で、大いなる献身と愛を込めて祭壇の奉仕をしてきました。シュリ・シェーシャギリ・ラーオは黙ってスワミのご命令に従い、夕方には祭壇の奉仕をしている姿が見られました。病気の兆候は消え去っていました。

6 か月後、この信心深い人物は再び病に臥せってしまいました。ラーオの状態はより一層ひどくなり、とても苦しんでいるのが見て取れました。ラーオの兄はパニックになってバンガロールから駆けつけ、スワミにシュリ・シェーシャギリ・ラーオをバンガロールのビクトリア病院へ連れて行くことを許可してほしいと願い出ました。

しかし、スワミはラーオの兄にこうおっしゃいました。

「彼の窮状を心配することはありません。私は、彼が通らねばならない苦しみを上手く乗り越えられるよう許しているのです。これが過ぎれば、彼は安らかで、とても幸せな死を迎えることができます。そうでなければ、何か月も前に彼が倒れた時、私は彼をあの世に送っていたでしょう」

そして、まさにその通りのことが起こったのです。

実に不思議なことに、シュリ・シェーシャギリ・ラーオは 1 か月後に回復しました。彼はとても健康で元気になり、祭壇での日課の仕事をして、周りの人々を幸せにしながら 6 週間を至福の内に過ごしました。そして、ある日突然、健康状態が悪くなり床に臥せってしまいました。ある晩、スワミはラーオの枕元に来られました。スワミと一緒に来たのは、偉大な帰依者であり、『サナータナ・サーラティ』誌の初代編集者でもあったカストゥーリ教授でした。そのきわめて重大な夜に何が起こったのか、カストゥーリ教授ご自身から聞いてみましょう。

「スワミは私にコップ 1 杯の温かい牛乳を持ってくるようにおっしゃいました。スワミはシュリ・シェーシャギリ・ラーオの名前を呼んで、飲ませているのは彼のババだよと伝えながら、コップの牛乳をスプーンで一匙ずつ全部お飲ませになりました。それからババは立ち上がって移動し、ドアのところでラーオの方を振り向いておっしゃいました。
『もう行ってもいいですよ！』。 そして 1 時間もしない内に、シェーシャギリ・ラーオはそれに従いました！　ババは、いつ彼が〔仕事に〕下りてくるべきか、いつ彼が〔あの世へ〕行くべきかをご存じだったのです」

これは、ババの人生で起こった一度きりの出来事ではありません。私たちは皆、ウォルター・コーワン氏に起こった出来事を知っています。よく引き合いに出されるヒスロップ博士の著書、『私のババと私』の中で鮮やかに記された蘇生の話のことです。このような事例はたくさんあるので、ここでは詳細には触れませんが、私たちが何らかの出来事を知っていたとしても、その陰には何百、何千という知らない（同様の）出来事が隠されているのです。サイの力は、静かに、無私無欲に、執拗なまでに、ずっと休みなく世界中のあらゆる場所で働いており、人々の心を変容させたり、家族を一つにしたり、精神を活気づけたり、命を蘇らせたりしてきました。なぜなら、サイは時間と運命の主だからです。

ババとコーワン夫妻

1953 年 8 月の最初の週にプッタパルティで起こったもう一つの出来事は、『奇蹟が生まれる』の中でハワード・マーフェット氏が記述していますが、その起こり方は、キリストが“ラザロ”を死から蘇らせた時のように実に劇的でした。ここで言う“ラザロ”とは、工場経営者であり、アーンドラ・プラデーシュ州、クッパムの名高い市民であった、年の頃は 60 歳

の V.ラーダークリシュナ氏のことです。

V.ラーダークリシュナ氏は、彼の妻と娘のヴィジャヤ、それに義理の息子のシュリ・ヘムチャンドと共にプッタパルティに来ていました。ダシャラー祭の祝賀行事が執り行われていましたが、ラーダークリシュナ氏がそこプッタパルティへ来たのには別の目的がありました。それは、ババに恐ろしい胃潰瘍を治してくれるよう頼むことでした。

プッタパルティで 2 日が過ぎたある日、ラーダークリシュナ氏はスワミが会場の中を歩かれているのを見かけました。そこで彼はスワミのもとへ駆け寄り、足元にひれ伏して次のように懇願しました。「スワミ、私は死んだ方がましです。この痛みにはもう耐えられません。あなたの御足に融合させてください」。スワミは彼の肩を持って起こし、慰めるような口調で、**「大丈夫です。痛みはすぐに治まります」**とおっしゃって、ラーダークリシュナ氏をお返しになりました。

しばらくすると、ラーダークリシュナ氏は発作に襲われて倒れ、舌を噛みました。スワミはすぐにやって来られ、彼の額にヴィブーティを塗られました。ラーダークリシュナ氏の胃は膨れ上がっていました。スワミは彼のお腹をやさしく叩きながら、しばらく傍に座っておられました。そこを立ち去る前に、スワミは**「心配いりません。すべては上手くいきます」**とおっしゃり、皆を安心させてくださいました。

翌日は本当に悪夢のようでした。ラーダークリシュナ氏は排尿できなくなり、彼の胃はさらに肥大化して、意識がなくなりました。義理の息子の K.S.ヘムチャンド氏が連れてきた男性看護師は、脈拍が確認できず、その他の検査も行った結果、彼は瀕死状態であると告げました。助かる方法はない、とその看護師は言ったのです。そして夕方までに、ラーダークリシュナ氏の体はとても冷たくなっていました。不安でいっぱいの 3 人の親族は、彼の喉から『臨終の喉鳴り』と思われる音を聞き、体が青く硬直していくのを見ました。胃はちょっと触れただけでも破裂しそうなほどパンパンに膨れ上がっていました。

ヴィジャヤとラーダークリシュナ夫人はスワミに会いに行きました。2 人はラーダークリシュナ氏が亡くなったようだとスワミに告げました。(当時は帰依者がとても少なく、今よりずっと簡単にスワミに会うことができました)。しかし、スワミはただ笑っただけで寝室へ入ってしまわれました。

悲しみに沈んだ母娘は『死人』の枕元へ戻り、祈りながら待ちました。彼女たちの祈りを聴いていたかのように、しばらくするとスワミが現れ、遺体を眺めていましたが、何も言わず何もされませんでした。3 人は夜どおし熱心に祈り続け、何か生きている兆候を確認したいと熱望する中、2 日目の長い夜が明けました。しかし、それは起こりませんでした。兆候はありませんでした。にもかかわらず、彼女たちのババに対する岩のように固い信仰心は揺らぐことがなかったのです。

ババの長年の帰依者であるヴェーンカタギリのラージャが、自分の車でラーダークリシュナ氏を少し離れた町の大きな病院へ連れて行こうと申し出た時、ラーダークリシュナ夫人はきっぱりと言いました。「スワミのご命令がなければ、私たちは何もできません。すべてスワミのご意志にお任せしているのです」。夫人はババがすべて上手くいくと約束してくださったので、ババが何とかしてラーダークリシュナ氏をお救いくださる、と完全に信じきっていたのです。

全身は黒変し、爪は青くなっていました。誰も一睡もできないまま夜が明けました。
3 日目の午前 4 時頃、そこにいた全員が涙を拭いながら去っていきました。3 人の親族は皆、静かに涙を流し始めました。体はこれまで以上に死体のようでした。黒ずんで冷たく、とても固く、死臭さえ漂い始めていました。別の人々がやって来て同情し、ラーダークリシュナ夫人に遺体をアシュラムから移動させるべきだと言いました。しかし夫人は答えました。「スワミのご命令がない限りできません」。中にはわざわざババのところへ出向いて、ラーダークリシュナ氏が死んで遺体が腐敗して臭っているので、クッパムまで遺体を送り返すか、プッタパルティで火葬すべきだと提案した人もいました。
しかしスワミは、**「そのうちわかるでしょう」**とだけお答えになりました。

人々が提案していることを行うべきかどうか尋ねるため、再びラーダークリシュナ夫人がスワミに会いに行った時、スワミのお返事はこうでした。
「彼らの言うことを聞いてはいけません。恐れてはなりません。私はここにいます」。
その上で、スワミはすぐ彼女の夫に会いに行くから、と伝えて夫人を安心させました。

ラーダークリシュナ夫人は遺体のもとへ戻り、娘と義理の息子と共に（スワミを）待ちました。10 分、30 分、1 時間が経ちましたが、スワミが現れる気配はありませんでした。トンネルの向こうに光は見えないように思われました。完全にあきらめてしまいそうになったちょうどその時、ドアが開いて、豊かな髪に赤いローブ姿のババがまばゆいばかりの微笑を浮かべて立っておられました。3 日目の午後 2 時半頃のことでした。

ババを見るなり、ラーダークリシュナ夫人は完全に泣き崩れてしまいました。ヴィジャヤも涙を流していました。彼女たちはラザロの姉妹のマルタとマリアのようでした。2 人は、来るのが遅すぎたと彼女たちが思っていた主の御前で嘆き悲しんでいました。するとスワミは、何も深刻なことはないかのように冗談っぽくおっしゃいました。

「ラーダークリシュナには産みの苦しみ（陣痛）が起こっているのですか？」

皆は静まり返りました。

「どうなっているか見てみましょう」とスワミはおっしゃって、部屋の中に入られました。どの時点で、人は死んでいると言えるのでしょうか？ それを言える人はいますか？

突然、“死体”が動くこともあります。実際、ラザロが死んだと知らせを受けた時、イエスは使徒たちにこう言いました。

ラーダークリシュナ氏と彼の救い主

「私たちの友ラザロが眠っている。私は彼を起こしに行く」。

〔参照：『ヨハネによる福音書』第 11 章 11 節〕

とにかく、話を続けましょう。ババは、涙でいっぱいの女性たちと悲しみに沈むヘムチャンド氏に優しく部屋を出て行くよう告げられました。部屋にはスワミと死人だけが残り、中で起こったことはスワミだけにしかわかりません。数分経ってドアが開き、スワミが 3 人とも中へ入るように合図されました。恐る恐る中へ入った時、3 人はわが目を疑いました！

これは真実なのか？　それとも幻想なのか？

そこには、ベッドの上で 3 人を見上げて笑っているラーダークリシュナ氏がいました！ 驚いたことに死体の硬直は消え、自然な肌の色が戻っていました！　3 人ともスワミの御足にしがみつき、彼らの涙が御足を洗いました。ババは患者の所へ行って、その頭を優しく撫でておっしゃいました。

「彼女たちに話しかけてあげなさい。心配していますよ」

「なぜ心配しているんですか？」と、ラーダークリシュナ氏は困惑して尋ねました。

「いったい私に何が起こったのですか？」

大きな笑い声をあげて、スワミはお答えになりました。

「出産です」。

皆が笑いました。それは、泣きながら笑うという何ともおかしな光景でした。ラーダークリシュナ氏は、枕元に座っているスワミを見つめて言いました。「私は大丈夫です。あなたがここにおられますから」。

すると、スワミはラーダークリシュナ夫人の方を振り向いておっしゃいました。
「私はあなたの夫をあなたの元に返しました。さあ、彼に温かい飲み物を持ってきてあげなさい」。

夫人がタンブラーに入ったホーリックス〔麦芽粉乳飲料〕を持ってくると、スワミ自らがラーダークリシュナ氏にスプーンで一匙ずつゆっくりと飲ませました。それから半時間、スワミはそこに残り、ラーダークリシュナ氏に優しく触れながら、スワミが『蘇らせた』その人を元気づけられました。
その時、スワミはヴィジャヤに**「お父さんはいくつですか？」**とお尋ねになりました。
「60 歳です」とヴィジャヤは答えました。
それから、スワミは４、５年前のことを思い出させてくださいました。ラーダークリシュナ夫人はスワミにお願いしていたのです。「スワミ、夫の家系では、兄たちは皆 60 歳で亡くなっています。どうか私の夫を救ってください」。そして、その時スワミは彼女の夫を救うと約束なさったのでした。それからスワミはラーダークリシュナ夫人の方を見ておっしゃいました。**「あなたはあの会話を忘れていましたが、私は忘れていませんでした。今日、私はあなたの夫に、命の贈り物をあげたのです」。**

その後、スワミはラーダークリシュナ夫人の頭に手を置いて、家族全員を祝福し、部屋を出て行かれました。

2 時間後、スワミはまた戻って来られました。スワミはラーダークリシュナ氏に、
「ラーダークリシュナヤ！　あなたはどこへ行っていたのですか？」とお尋ねになりました。
ラーダークリシュナ氏は答えました。
「あの場所はとても平和で、とても心地よく、とてもとても快適でした、スワミ。どうしてあなたは私を連れ戻したのですか？ あそこは天国のような場所でした」

のちに、スワミはカストゥーリ教授に打ち明けられたようです。
「彼の子供たちはまだ幼く、彼は遺書さえ書いていませんでした。子供たちの結婚式も挙げていませんでした。だから私は彼を生き返らせることにしたのです。今回、私が授けた何年分かの余命は、彼の次の人生から差し引くことにしましょう」。
寿命の配分まで修正されるとは、なんときめ細やかな気配りでしょうか！

翌日、ラーダークリシュナ氏はバジャンに歩いて行けるほど元気になっていました。3 日目には、イタリアにいる娘に 7 ページにわたる手紙を書きました。家族はそれから数日間、プラシャーンティ・ニラヤムに留まり、その後、ババの許可を得てクッパムの自宅に帰りました。胃潰瘍と合併症は永遠に消えてしまいました。

悠久の時が流れました。文明が現れ、栄えては衰退しました。人類、自然、科学、すべては移ろい変化しました。しかし、変わらずにあり続けるものが一つあるとすれば、それは神です。神の愛、人類に対する神の慈悲、心遣い、そして一点の陰りもない神の栄光です。これを十分に証明できるもう一つの驚くべきエピソードがプラシャーンティ・ニラヤムで起こったのは、ちょうど 20 年前にさかのぼります。それは計り知れないサイの無限の力に対する証言となっています。今度は、プラシャーンティ・ニラヤムの学生寮に住んでいたある若い学生、研究生の話です。

この事件全体に関与し、目撃者でもあったナラシンハ・ムールティ氏は、当時の学生寮の寮監でした。そしてこれは、2004 年 11 月 1 日に彼がサイクルワント・ホールのババの御前で述べた話です。

「それはババ様の 60 歳のご降誕を祝う年、1985 年 10 月のことでした。朝早くに私は起こされました。博士課程の研究生の 1 人は慢性の喘息患者でした。その彼が呼吸できなくなったのです。私たちは急いで彼をプッタパルティの総合病院へ連れて行きました。その青年の名前はナーラーヤン・シャルマでした。彼はボンベイ出身で、学生寮の現在の寮監であるシュリ・シヴァ・シャンカラ・サイのクラスメートでした。

病院へ連れて行った時、すでに彼の体は冷たくなり、青く変色していました。一人の女性医師が手当てをしてくれましたが、彼に脈はなく、息もしていませんでした。当時、その病院の院長だったチャリ医師が自宅から駆けつけました。チャリ医師も青年の体を調べ、そこにいた私たち全員に告げました。『もうだめです。この青年は死んでいます』

朝の 6 時になろうという時刻でした。そのような事態が起こった時、寮監がどんなに困ってしまうかは想像に難くないでしょう。私には、何が起こったのかをマンディールへ行ってスワミにご報告する勇気さえありませんでした。それをしたのはチャリ医師でした。チャリ医師はマンディールまで歩いていき、スワミに事の次第をすべてお伝えしたのです。スワミはおっしゃいました。**『彼には何も起こりませんよ。彼は大丈夫です』。**

それから、スワミはヴィブーティを物質化してチャリ医師に渡し、おっしゃいました。**『これを彼の胸につけて、背中に湯たんぽを当てなさい』。**

チャリ医師は戻り、青年にヴィブーティをつけて、湯たんぽを当てました。

それでも、私たちはまだ困った状態にありました。その青年は依然として脈拍がなく、呼吸していなかったので、どうすればよいかわからなかったのです。体はまだ冷たく、青い色をしていました。あらゆる点から考えて、その青年は死んでいました。それから医者たちは私に言いました。『ナラシンハ・ムールティさん、今度はあなたがスワミの所に行って報告する番ですよ』。

朝の 6 時 30 分でした。私はマンディールまで歩いて行き、スワミにご報告しました。スワミはおっしゃいました。**『彼には何も起こっていません』**。 実際、スワミはホットコーヒーの入った魔法瓶を私に渡して、こうおっしゃいました。

『行って、それを彼に与えなさい』。 私は当惑してしまいました。

私は魔法瓶を持って病院に戻りました。病院に着くと、私が魔法瓶を持っているのを見て女医が尋ねてきました。『そのコーヒーは誰のためのものですか？』
私は何も言うことができず、仕方なしにその青年の方を示しました。

女医の顔は完全に無表情になりました。しかし（その顔からは）『寮監さん、あなたは頭がおかしくなったんじゃないの？』と感じていることが見て取れました。それは彼女の言葉にならない言葉だったのです。私はコーヒーをどうすれば良いのかわかりませんでした。ナーラーヤナ・シャルマ青年の遺体には白い布が掛けられていました。足のつま先だけは見えていました。そして突然、動くのが見えました！　彼のつま先が動いたのです！

私たちは大喜びしました。それから女医はとても嬉しそうに青年の側へ行きました。青年は目を開けることはできませんでしたが、つま先は動いていました。女医が指を鼻のところに当てると、ゆっくりと青年の呼吸が戻ってきました。それから、女医は青年の耳元で次の言葉をささやきました。『ほら、スワミがあなたにコーヒーを届けてくださいましたよ。どうか飲んでちょうだい』。スプーン一匙のコーヒーが青年の口の中に注がれ、彼はそれを飲み込みました。そして、一匙一匙コーヒーが彼の口に運ばれました。女医が再び彼の体を調べると、脈拍が戻っていました。青年が息を吹き返したことを確信した女医は、彼の腕に血圧測定器をつなぎました。

ちょうどその時、スワミが当時の『サナータナ・サーラティ』誌の編集長である、故シュリ V.K.ナラシンハン氏と共に到着されました。スワミの声を聞いて、青年はゆっくり目を開けようとしました。スワミは青年の近くに来ておっしゃいました。**『何という青年だ！　皆は君が死んだと言っていましたよ。まだ生きているじゃありませんか！』**。

青年はスワミを見ました。彼の顔は無表情でした。そこで、スワミはその場にいたチャリ医師と 2 人の女医の 3 人の医師全員にお尋ねになりました。

『彼は死んでいたのですか？　』　3 人とも口をそろえて言いました。
『はい、スワミ。彼は死んでいました』
それから、スワミは女医の一人にお尋ねになりました。
『なぜ彼が死んでいたと言えるのですか？　』
『スワミ、私たちが調べたところ、脈拍がなく、呼吸もなく、心臓の鼓動もありませんでした。体は冷たく青くなり、医学的見地から見れば、それは死んでいたことになります』
『では、彼はどうやって生き返ったのですか？　』と、スワミはお尋ねになりました。

『スワミ、あなたは神様です。あなたなら何でもできます』と、その女医は答えました。
ラザロのドラマが再演されたのです。ただ起こった場所だけは違っていましたが。

総合病院の外には 50 人ほどのクラスメートたちが集まっていました。彼らは友達がこの世を去ったと聞いて駆けつけてきたのでした。スワミは窓の外を眺められました。青年たちは皆、悲しそうな顔をしていました。それから、スワミは私の方を見ておっしゃいました。
『行って、ここで起こったことを彼らに話してあげなさい』
スワミは、その青年は確かにスワミが生き返らせたということを教えてくださったのです。それから、スワミは茶色がかったチョコレートのようなものを物質化し、青年にお与えになりました。青年はすぐそれを口の中に放り込みました。マンディールに戻ってから、スワミは錠剤の入った 3 本の瓶を物質化し、錠剤の服用方法の詳しい説明書をつけて病院へ送られました。

ほどなくして、その青年は学生寮に戻り、研究に勤しんで、博士号を取得しました。
神の化身にとって、一切を成し遂げるのは、他でもない純然たる神の力、神の内なる力です。神に道具は必要ありません。神には不可能なことは何もないのです」
寮監は話を終えました。

さて、話を 90 年代に起こった出来事に移しましょう。バガヴァンの長年の帰依者であり、現在はプラシャーンティ・ニラヤムのアシュラムに住むヴェーンカテーシュワラン氏の話です。これは、伝えなければならない奇跡的な『よみがえり』について、彼自身が語ったことです。

「それは 1994 年 10 月 1 日の午後に起こりました。何人かの学生や招待客と共に、私はトライー・ブリンダーヴァン（バンガロールのスワミの住居）の中にいました。スワミが話をされている最中に突然、胸が締め付けられるような感じに襲われました。おびただしい汗をかき始め、妙に息切れがしました。

前にいる人に倒れかかる前に私にできたのは、ヴィブーティをさっと 3 つまみポケットから取り出し、続いて『サイ ラーマ』を 3 回唱えることだけでした。私は暗闇の中へ落ちて行きました。光の海の中にオレンジ色のローブが見えました。続いて、生気のない私の体が床の上に横たわっているのが見えました。信じられませんでした！ 私はとても自由で、完全な自由を感じていたのです。それから、遠くで声がこだましました。
『起きなさい！ あなたのサイラーマが来ましたよ、起きなさい！』

手術前のヴェーンカテーシュワラン氏と彼のサイラーマ

記憶がおぼろげなので、次に何が起こったかは覚えていませんが、私が息を引き取った直後、近くに座っていた医者が私の体を調べ、バイタルサイン〔生命徴候〕がないことを確認したと後から聞きました。苦労の末、この件は前の方でジューラー（ブランコ）に座っていらしたスワミに伝えられたそうです。私たちの慈悲深い主は即座に立ち上がり、ご自分の銀のタンブラーを手に取って、私の遺体があるところまで歩いてこられました。

スワミはご自分の指に水をかけられ、それを少しずつ私の口の中へ滴らせました。それから先ほど引用した、（倒れた時に聞こえた）言葉をおっしゃったのです。

『起きなさい！　あなたのサイラーマが来ましたよ！　』

私の生気のない体がぴくりと動き、目はバガヴァンを見るために開きました。バガヴァンはそこに座っていた人々に目を向けながら、断固たる口調でおっしゃいました。**『他にどんな奇跡が必要ですか？　ヴェーンカテーシュが亡くなったので、私は彼を生き返らせたのです』。**

私は、助けられて自分の部屋まで戻りました」

さらに、スワミはヴェーンカテーシュワラン氏にまた別の新たな命を与えられたのです。彼が生き返ってからちょうど 5 年後の 1999 年、スワミは現代の癒しの寺院であるシュリ・サティヤ・サイ高等医療機関で彼に心臓手術を受ける祝福をお与えになりました。それだけではなく、スワミは彼の手術の前に病院を特別訪問して、ヴィブーティを物質化し、ヴェーンカテーシュワラン氏をあふれんばかりに祝福されたのでした。ヴェーンカテーシュワラン氏は今も健在で、スワミの仕事をしながらアシュラムで献身的に時を過ごしています。

蘇生は、スワミがヴィブーティや指輪やネックレスなどを物質化される現象ほどよくあることではないかもしれませんが、必要な状況であれば、幾度となくスワミは人々の命を蘇らせてこられました。私たちは、スワミが約束を守り、スッバンバの最後の願いを聞き入れるため、どのように彼女を「目覚めさせた」かを知っています。『サティヤム・シヴァム・スンダラム』に描かれている、このスリルに満ちたエピソードをまだ読んでいない方々のために、ここにあらましをお伝えしておきましょう。

スッバンマはスワミの少年時代にスワミの「健康」を最も気にかけていた人であり、プッタパルティに集まってくる何百人もの巡礼者のことを最も心配していた人でもありました。今でも、ババはお話しになります。巡礼者たちが捧げたココナッツの山からチャツネ（インド料理）を作るため、スッバンマの家の石臼〔すり鉢とすりこぎ〕はいつも忙しく動いていた、と。彼女は一日８時間近くも石臼を挽いてすり潰していたのです！ スッバンマは計り知れない大きな愛と献身を主に捧げていたので、ババは彼女の一つの願い・・・臨終の瞬間にババのダルシャンを受けること――を叶えましょうとおっしゃいました。そして、ババは次のようにその願いを叶えられたのです。

1950 年代のことです。スッバンマは具合が悪くなり、ブッカパトナムへ運ばれました。しかし、具合が悪いにもかかわらず、ある日スッバンマは牛車に乗って、当時建築中だったプラシャーンティ・ニラヤム（新マンディール）を見にやってきました。その後まもなく、スッバンマは病に臥せって、寝たきりになりました。彼女の容態は悪化しましたが、ババは遠いバンガロールにいらっしゃいました！

スッバンマはうわごとで、ババのことや自分が見る特権を与えられたシルディ・ババのヴィジョン、自分が目撃した数多くのクリシュナのリーラーなどについて語りました。気が付くと、彼女は同じことや同じ人物について話していました。彼女はそのような心情にあまり共感できない親族のはざまにいました。というのも、親族はあの変わった奇跡を起こす小さな少年をスッバンマが愛することで、彼女は親類縁者への愛着をなくしてしまうのではないかと感じていたからです。そのため親族はスッバンマに、彼女のババは 100 マイルも離れた所にいるのだから、衰えつつある関心をより身近な人々や事柄に集中させたほうが良いと忠告しました。しかし、彼女の帰依心が揺らぐことはありませんでした。

一方、ババはティルパティに向けてバンガロールを出発し、そこで少数の帰依者たちとしばらく過ごされました。もちろんババは、スッバンマの魂が朽ちゆく人間の肉体から自由になろうと苦しんでいて、ブッカパトナムで死の床に臥せっていることをご存知でした。スッバンマの周りの人々は、彼女が最期の息を引き取ったことを告げました。

しかし、スッバンマの顔が妙に輝いて見えるので、親族は遺体を火葬場へ運ぶことを躊躇しました。スッバンマが亡くなったと告げられた時、何人かの賢明な人々は首を横に振りました。彼らはもう少し待つよう忠告し、親類縁者を優しく諭しました。「鳥はまだ飛び立っていません」と彼らは言いました。

鳥かごの扉が開いていたとしても、どうしてその鳥が飛んだりできるでしょう？　彼女はダルシャンを受けなければいけないのです。ババが来るまで待たなければいけないのです。そして、ババも彼女の枕元へ急いでいました。

ババは車でティルパティを出て、プッタパルティに到着し、ブッカパトナムへ向かいました。スッバンマの最初の死の宣告からまる３日間経っていました。スッバンマの目の輝きは失われていました。彼女は床の上に置かれ、人々は不安でイライラしている様子が見て取れました。ババはスッバンマの側に座って、静かな声で呼びかけました。「スッバンマ」、「スッバンマ」と２回だけお呼びになったのです！ すると、そこに集まっていた全員が仰天したことに、スッバンマは目を開きました！

スッバンマはババの方へ手を伸ばし、ババの手のひらを固く握りしめて、愛おしそうに撫でました。ババは指でスッバンマの唇に触れました。彼女の口が少し開きました。まるで、ババが魂の渇きを癒すために何か与えようとしているのを知っていたかのように。
ババの指からスッバンマの口へ不滅のガンジス河の水が注がれ、彼女は解脱者たちの仲間入りを果たしました。何という素晴らしい救済でしょう！これ以上の臨終があるでしょうか！　スワミは、だれにいつ何がふさわしいかをご存じなのです。

なぜスワミはこの人を生き返らせ、別の人はそうしないのかと疑問に思う人々もいるかもしれません。なぜある人々を重い病気や瀕死の状態から救い、他の人々にはそうしないのでしょうか？ なぜスワミはご自分の力を限られた人々だけに使い、他の人々には使われないのでしょうか？

この点については、ハワード・マーフェット氏が著書である『奇蹟が生まれる』の中で見事に説明しています。

「キリストは、なぜすべての人々を救わなかったのか。そしてなぜラザロだけを墓からよみがえらせたのか。キリストは――のちにはサイ ババも――親しい信者の家族を死から救うために特別努力をしたのだろうか。たぶん、そうだろう。しかし私には、それにはもっと深いわけがあると思われてならない。ラザロの病気をきいた時、イエスは謎のような言葉を述べた。『この病気は死に至る病ではなく、神の栄光のためである。神の子はそれによってたたえられるであろう』。それで普通の条件のもとでは死に至る病であったのが、神人（ゴッドマン）の働きを通じて、神の栄光をあかしする機会となったのかもしれない。このとき、カルマという意味深遠で複雑なかかわり合いを持つ問題が提起される。特別に病が癒される場合、あるいは死が容赦なく生命を奪う場合、カルマはどの程度までかかわり合いを持つのだろうか。そしてまた病人のカルマに対して、神人はどの程度まで介入すべきなのか。」　（『奇跡が生まれる』P202 より引用）

たぶん以上のことが答えになっていると思うのですが、最終的な結論はこうです。神は全知全能です。神は何でもできます。事あるごとに自分の力を見せびらかすのは神の仕事ではありません。神がなさることは何であれ、きわめて妥当な理由があります。神は私たちの現在、過去、未来をご存知です。私たちにとって何が良いかもご存知です。そして、神が間違いを犯されることはありません。今の人生における現在と過去以外のことを何も知らずに、時おり私たちは不平を漏らします。ですが、不平を言うことではなく、スワミの蓮華の御足にすべてをお任せすることによって問題は解決します。なぜなら、スワミは常に助けようと待っておられるからです。太陽の光が差し込めば、ほんのわずかなドアの隙間からでも暗い部屋が明るくなるように、スワミは 私たちの心の玄関口に立って、ほんのわずかでもドアが開くのを待っていらっしゃるのです。

ラザロの蘇り

ですから、神に私たちのハートを開きましょう。神を信じましょう。神が私たちの傍にいてくだされば、不可能なことは何一つないのですから。

出典：http://media.radiosai.org/journals/Vol_03/06JUN01/cov